

フェイクニュースに満ちた世界での リスク情報の扱い方

リスク情報を効果的に取り扱うためには、「3K」ならぬ「12K」がカギとなる。

株式会社ジェイ・エス・エス

危機管理コンサルタント **佐室高志**

飛び交う無数の情報は玉石混交

旧年中は様々な事象が企業活動に脅威をもたらしたが、企業の危機管理担当者は、2022年も関係者の安全を図るために各国の最新情勢をモニタリングする日々が続く。

現代では膨大なリスク情報を迅速・手軽に入手できるようになったが、それらの情報の重要度や信頼性は玉石混交であり、中にはフェイクニュースも大量に含まれている。

重大事件や災害が発生するとフェイクニュースも一斉に流れ、事実を見えにくくする。それらは悪意や世論誘導のために流されるだけでなく、単に閲覧数を稼いで広告収入を得るために捏造される場合もあり、年々増える一方である。

ウィスコンシン州暴走殺傷事件の例

例えば、昨年11月21日に米ウィスコンシン州でクリスマス・パレードに暴走車が突入した事件(6人死亡、62人負傷)では、発生直後に車を運転する白人男性の画像が「容疑者」としてSNS上に投稿された。この時はすぐに「フェイク画像」と見破られ、実際の暴走犯は黒人の男であることが判明したが、暴走犯が何者かによって、事件がもたらす影響は大きく変わってくる。

同州では、昨年8月の黒人差別反対(BLM)デモの際に参加者の黒人男性3人を半自動小銃

で殺傷した白人少年の裁判が行われていた。暴走事件の2日前、少年の正当防衛が認められて無罪評決が下され、「不当評決」との反発から暴力的対立再燃への警戒が高まっていた。

また、欧米を中心にイスラム過激分子によるクリスマス狙いの暴走テロのリスクが高まる時期とも重なっていた。

結果として、同事件はテロや政治的要素のない単発の事件であったものの、実態が分からない初期段階では、さらなる暴力や模倣犯などを警戒する必要があった。

リスク情報を取り扱う「12K」

このようなリスク情報を入手した時、危機管理担当者は新たな凶行が続く危険性を想定し、現地関係者に注意喚起をしなければならないが、情報が錯綜しているうちはリスク評価が難しい。と言って、事実関係が確定するのを待っていたら注意喚起が遅れてしまう。

そこで、よりの確に状況判断して危機管理に繋げるためのポイントを、分かりやすいように「か行(K)」で始まる12のキーワードでまとめてみた。

まずは、リスク情報に関して信頼性・速報性の高い複数の情報源を日頃から「①確保」する。海外拠点側との情報交換も貴重な情報源であり、それらの情報に日々接することで「②見識」が身に付く。情報に「③検証」を加えること